

ジンメルにおける二つの「形式的欲求」の位置づけと意義

- 同等性と差異性への欲求 -

桜井 芳生

[はじめに]

ジンメルの「形式」社会学の実践を子細にみても、ジンメルの方法論的言明は、貫徹されているとはいえないということがわかる。彼の実際の分析をみても、方法論的言明とは、若干ことなっただけで「形式」の語が使われている。このことは、とくに「形式的欲求」においてそうである。我々は、とくに彼の「流行」論に注目することで、「多面的社会学者」であり「萌芽的視点の宝庫」であるジンメルの一つの通奏低音として、そしてまた彼の「形式社会学」と「生の哲学」とをつなぐものとして、「形式的欲求」とその典型としての「同等性と差異性」への欲求を、位置づけることをここで試みてみよう。

[1] ジンメル「形式社会学」における方法論と実践の齟齬－問題の所在

周知のようにジンメルの社会学方法論におけるおおきなモチーフの一つは、社会学の固有の客体領域を確定することで個別科学としての社会学の存在理由をあきらかにすることであったといえるだろう。彼の『社会学』第一章「社会学の問題」をみてみよう。

ジンメルは、「新しい科学」としての社会学を正当づけるものは、これまでしられなかった対象を発見することではない、という。「すべての科学は、それらがある種の事柄全体をそのいずれか一つの側面から、つまりいずれか一つの概念の視点から観察するかぎりでの、抽象作用にもとづいている」。このようにジンメルは、個々の科学にたいして特定の視点を要請し、そのそれぞれの視点によって事物の総体から分析を抽象することに科学のはたらきをみている。同様に、「特殊科学としての社会学」もまた、それ自体十分に知

られている諸事実に、新しい視点から、新しい一つの線を引くさいに、その特有の客体を見つけることができる。ジンメルはまず、「若干の個人が相互作用をいとなむばあいには社会が存在する。」という。そして、こうした相互作用はつねに特定の衝動から、あるいは特定の目的のために生ずるものである。そして、これらの相互作用のうちにおいて「衝動・関心・目的・性向・心理的状态および感動として存在する全てのもの」を彼は「社会化の内容いわば質料 (Materie)」と呼ぶ。しかし、「生をかりたてるこれらの動機づけは、それ自体で独立してはまだ社会的な本質を持つものではない」という。すなわち、この「内容」は社会の本質ではない、というのである。これらの内容が社会を形づくるのはある特定の「形式」のもとでの相互作用である場合のみである。そしてこの「形式」に、個別科学である社会学の固有の客体をみいだすのである。「したがって、その対象が社会であってほかのものではない一つの科学があるべきだとすれば、それは、これらの相互作用、つまり社会化のこれらの様式と形式だけを研究しなければならない。」つまり、ジンメルは、広義の社会のうちに離れがたくむすびついている「形式」と「内容」を科学的抽象によって区別し、前者の「形式」をとりあつかう「一つの特殊科学」すなわち形式社会学の成立可能性を説くのである。そして、「社会学的問題とは、社会化の純粋な諸形式の確立、その体系的整備、その心理学的基礎づけ、およびその歴史的展開をさす」と述べ、諸「形式」の確定ならびにその分析を、彼の社会学の課題にしている。

ところが、ジンメルの内容と形式の区別にはある難点がある。それは「“衝動・欲求”めぐって、“内容”と“形式”の区別わけが混乱している」ともいえるし、あるいは、また「彼の“形式”社会学の認識利得の源泉は、過度に“内容”に由来しすぎている」と表現することもできる。前者に似た批判は、阿閉吉男がおこなっている。ジンメルは、『社会学の根本問題』のなかの「形式社会学」の章「社交」において、社交性を「社会化のゲーム形式」としてみとめておきながら、その分析に「社交的衝動」（前述のように、衝動はジンメルにおいて「内容」にふくまれる）をもちだしており、これを阿閉吉男は「自己矛盾におちいつているといわざるをえない」といっている（『ジンメル社会学の方法』133ページ）。

にたような難点はジンメルの形式社会学の随所に見て取る事が出来る。たとえば、彼の『社会学』の中の第4章「闘争」においては、「敵意の衝動・闘争欲は根源的内発的衝動である」と彼はみとめ（くりかえすが「衝動」は、「内容」のほうに分類されていた）、この「衝動」を分析視点にしておおくの形式社会的分析がなされている。またおなじく

第5章「秘密と秘密結社」においても「個性欲求」「結社化欲求」「共同衝動」など
をもちだして、分析をおこなっている。

〔2〕「形式的欲求」の水脈

以上のように、ジンメルの方法上のタテマエ—すなわち「衝動・欲求・関心・目的・性
向」等を「内容」とし、そこから抽象された（それを捨象した）「形式」を社会学の固有
の客体にする、という一貫は貫徹されているとはいえない。しかも、すぐつぎにのべるよう
に、このようなジンメルが展開する「欲求」や「衝動」は、彼自身によって「形式的」な
ものと形容されているのである。そもそも「形式」が、「衝動」や「欲求」といった「内
容」から抽象された（「内容」を括弧にくくり、「内容」を捨象した）ものであったのだ
から、この「形式的欲求」は、形容矛盾であるといえるだろう。しかし、彼の実際の分析
を見てみると「内容」と「形式」の区分は彼の方法論上の言明とは若干ことになったしかた
でなされている箇所があることがわかる。

もう一度「闘争」をみてみよう。S 195あたりで、彼は闘争が、 \langle なにもものかにいた
る目的 \rangle によって規定された「手段」にすぎない場合と、闘争がもっぱら \langle それ自体とし
ての目的 \rangle となっている場合とをわけ、後者のような闘争は「ある形式的な敵意の衝動
einen gewissen formalen Feindseligkeitstrieb」によって明らかにされる、とのべてい
る。また、そのすぐ次の節で、彼は「敵意の自然性」についてのべているところでも、こ
れを人間関係の一つの「形式」あるいは「基礎」とよんでいる。これを彼はべつのところ
で、（S 197、26ページ）「敵意は、その対象の外的な現実によって触発されるのでは
なく、それ自体からみずからの対象を作り出す所の人間の原初的エネルギーに数えられる」
といている（S 198、28ページも見よ）。そして、1ページほど後においてこの「敵
意」が「純粹で形式的な闘争欲 (reiner, formaler Lust am Kampfe)」といかえられ、
これが「合目的的な (zweckmässig)」憎悪と対比的に述べられている。

また、「秘密」のS 273においても、なんらかの目的に対して秘密が「手段」として
持つ意義以外に、秘密がそれ自体として持つ「魅惑と価値」についてふれ、これを「その
ときどきの内容を度外視して形式的に秘密に満ちた行動の独特な魅力」として語っている。
さらに、「流行」論においても（「流行」論に関しては後に詳述する）、「流行が社会的

な、そしてまた、形式的心理的な欲求 (sozialer oder auch formal psychologischer Bedürfnisse) の所産にすぎないことは、即物的 (sachlich)、審美的、その他の合目的性 (Zweckmässigkeit) の関係のなかに流行形成の根拠がきわめてしばしばいささかも見出されないという事実によって、おそらく最も強力に証明されるであろう。」 (S 35、35ページ) とのべられ、この「形式的心理的欲求」が数行あとで「典型的社会的な (typisch-sozialen) 諸動機」と言い換えられている。

『社会学』の「上位と下位」の章の S 126 においては、「流行」論における「形式的心理的欲求」とおなじような「同等のものに引きつけられる」動機と「対立するものに引きつけられる」動機が「すべての社会的な形成にとってかぎりなく重要」なものとしてあげられ、この動機が次の段落でオーストラリアの原住民における「個々の有用性 (Nützlichkeiten) にはほとんどまったく還元されない感情」と言い換えられている。(ジンメルの「有用性」に関する議論については、『貨幣の哲学』分析篇第一章第Ⅱ節も参照せよ)。

このように、彼が「形式的」な衝動というときの「形式的」という意味は、彼が方法論上の言明においてのべているような「衝動・欲求・関心・目的・性向」としての「内容」から抽象した(「内容」を捨象した)、という意味よりも、“なんらかの目的のための手段というよりはそれ自体が目的であるような、という意味で非合目的な” “対象を志向するのではない、という意味で非対象的な” “往々にして当事者が気がつかない(当事者は通常、「自分は目的・対象を志向している」と考えているから) という意味で潜在的な” “有用性には還元されないという意味で非有用的な” “非-即物的 (sachlich) な” 衝動・欲求に掛かる修飾語だと言えるだろう。

それにしても、ジンメルは、なぜこのような「欲求・衝動」を重視し、それを「形式的」なものとしたのであろうか。それを考えるために、我々は、次節で、彼の「流行」論においてこの「形式的欲求」をたどってみよう。そして、次々節でそれと彼の「生の哲学」との連関をみてみよう。

[3] ジンメルの「流行」論

さてジンメルのあつまっている「形式的」欲求として、我々はまえから彼の「流行」論における二つの欲求に注目してきた(とくにこれに注目する意義については次節をみよ)。

ジンメルの『哲学的文化』に収録されている「流行」は流行分析の学説史においては古典的地位を占め、さまざまな流行論においてしばしば言及されている。ジンメルの流行に関する考察は、池田光義によると「流行の心理学」（1895年）『流行の哲学』（1905年）を経て、『哲学的文化』の所収論文になっているが、彼の流行に関する言及は初期の『社会分化論』（1890年）から『貨幣の哲学』を経て、『社会学』（1908年）にいたる主要著作の各々に於いてなされている。この事から見ても、彼の思想にとって、「流行」の問題はトリヴィアルなトピックではなくて、かなりの重要性を持つトピックであることがうかがえる。ところが、かれの流行論が、ジンメルの思想全体において持つ意義について問うてみても、池田がいうとおり「ジンメル流行論の思想的側面に関する問いを持って流行文献やジンメル研究文献にあたってみても、この問いに対するじゅうぶんな答えをみいだすことはむづかしい」。ジンメルの流行論といえば、彼の思想的背景とは独立に論じられることが多い。しかし、「流行」論は、我々の見るところ彼の「生の哲学」と不可分の関係にあるように思われる。

「流行」の冒頭で彼はこう述べる。

「我々は生の諸現象を把握するために与えられている仕方によって、現存在の全ての時点に、多数の力を感じ取る。しかもそれは、これらの諸力の全てが、本来は現実の現象を越えようと努めているが、それらの無限性が他の諸力の無限性と衝突して屈折し、単なる緊張力 (Spannkraft) と憧憬 (Sehnsucht) に転化するというふうなのである。完全な、きわめて実り豊かな全ての行為にすら、我々はまだじゅうぶんには表現されていないあるものを感じる。これはたがいに衝突する要素相互の制約によって起こるのだが、これらの諸要素の二元論において、ほかならぬ生の総体の統一性が明らかになる。……この二元論は、直接には記述されることはできず、我々の現存在にとって典型的な個々の対立において、その形成されつつある最終の形式として感知されるに過ぎない。……それは精神生活においても行われていて、我々は、一方では普遍化の努力によって導かれ、他方では、個別的なものを把握しようとする努力によって導かれる。……社会の歴史全体は、闘争と妥協、我々の社会的なグループとそのグループからの個人的逸脱との融合から生じる緩慢に獲得され急速に失われる和解によって展開してゆく。……人類の歴史におけるあらゆる本質的な生の形式は、それぞれの分野で、持続、統一、同等性 (Gleichheit) への関心と、変化、特殊なもの、独自のものへの関心とを合一させる、特殊な様式を示している。……一方の側は「模倣」への心理的傾向によって支えられている場合が多い。……

・社会制度は両者のはてしない敵対関係が共同作業の外形をとった —— 決してながつききしない —— 和解の観を呈するのである。・・・流行の生存条件は以上によって規定されたことになる。流行はあたえられた範例の模倣であり・・・しかも、差異の欲求 (Unterschiedsbedürfnis)、分化 (Differenzierung)、変化逸脱の傾向をも満足させる。」

(S 31~33、31~33ページ)

以上のような、あい対立する二つの欲求・傾向を我々としては、同等性への欲求・と・差異性への欲求、とまとめておこう。上の引用文からわかるとおり、ジンメルにとって「流行」論を支える同等性・差異性への欲求論はたんに流行のみを説明しうる狭い仮説ではない。彼にとって流行とは、彼の「生」(Leben)把握からの帰結としての「二元論」(Dualismus)を「融合」「合一」「和解」させる形式の一つのスペシャルケースなのである。

(次図)

生 *Leben*

二元論 *Dualismus*

憧憬	緊張力
休息	運動
普遍化	個別的なもの
社会的グループ	グループからの個人的逸脱
持続	変化
統一	特殊なもの
同等性	独自のもの
模倣	差異・分化

↓
生の形式 = 両者を合一させる特殊な様式

↓
(スペシャル・ケース)

社会制度 = 両者の和解

↓
(スペシャル・ケース)

流行

[4] 生の哲学と文化形象

では、このような帰結をもたらすジンメル「生」Lebenとはなになのだろうか。
彼の『生の直観』を見てみよう。

彼のいう「生Leben」とは、ある自己超越の動きであり、それにともなって、生は、「より以上の生Mehr-Leben」と「生より以上のものMehr-als-Leben」(S 20、33ページ)という二つの相補的な定義を持つという。自己超越の動きである生は、彼によると、精神的なレベルにおいては「おのれを何かの形式のもとに明示する以外のことは、全くない」という(S 21-22、35ページ)。

「けれども、生によって形成され形を仕上げられたそれらのものは、成立の瞬間すでに事象としての独自の意義・堅固さおよび内的な論理をもっており、それらを形成した生にこれらによって対立する。というのは、生は休みない先への流れであり、いかなる形式であれそれが形式であるがゆえにその上を越えて氾濫するからである。(S 22、36ページ)・・・生であるが故に形式を必要とし、かつまた生であるが故に形式以上のものを必要とする。・・・生とはまさしく、形式づけられていることと乗り越えとの統一体である。(S 22、36ページ)」

また晩年の講演『近代文化の葛藤』の冒頭で生と文化の関係について次のようにいっている。

「生が単に動物的なものを越えて精神の段階に進むやいなや精神の中に内的対立が明らかになり、この対立の発展・和解・新生が文化の全道程をなすようになる。生の創造的活動が若干の形象Gebildeを作り出すときに、我々は文化について語っている。(S 3、239ページ)」

この「形象」をかれはまた「文化形象Kultur-gebilde」とよび(S 4、240ページ)、その例として「社会制度、芸術作品、科学的認識」その他をあげている(S 3、239ページ)。

ところが既に述べた様に、自己超越のはたらきとしての生はこれらの文化形象としての「容器(S 3、239ページ)」をのりこえ、ふたたび捨て去ることとなる。そして「後続の生は、ついにはもうこの容器には宿らないようになってしまう。・・・ここに文化が歴史を持つという究極の理由がある。(S 4、240ページ)(強調ジンメル)」

つまり、精神的レベルにおける・生にとっての形式の不可欠性があり、しかし、その「形

式」を不可避的に乗り越えるものとして「生」があるのである。それゆえに諸「形式」の不可逆的変遷としての「文化 - 史」が生じるのである。

以上を踏まえて前節の図をさらに精緻化すると次のようになるだろう。

生 Leben

↓ ← 精神・文化のレベル
二元論

生より以上 より以上の生

形式化 形式ののりこえ

この対立の典型

同等性 ↓ 差異性

この対立の

↓ 発展・新生 → 文化の歴史性 (マクロ・通時)

↓ 和解 → 文化形象 (ミクロ・共時)

↓ ex

社会制度

芸術

宗教

↓ ex

流行

(いうまでもなく、ここでは、ある意味で、「形式」という語は、厳密には二義的に使われている。第一には、件の二元論的対立の一方の項として。第二は、その「対立」を「合一・和解」するものとして。しかし、後者も通時的には、やがて生による乗り越えの対象となるのだから、結局は前者と等しくなる)。

このような読解からいくつかの含意を引き出すことができるように思われる

まずはじめに、ジンメル思想における社会学・哲学・美学などの相互の位置づけである。従来、ジンメルは哲学者・社会学者・美学者といった多面的な思想家といわれてきたが、必ずしもそれら相互の連関があきらかにされてきたとは言いがたい。以上のように見ると彼はつねに「生の哲学」を根本にするところの「文化形象」の分析者であったと言えるだろう。そして彼の分析対象である「文化形象」のおもなものが「社会制度」であり、かつ、美学者であるのは、彼の思想の不可避的な統一的帰結といえる。

次に、社会(科)学における、(彼の主張した)「形式」社会学的視点の意義である。本稿の最初でふれたが彼の社会学方法論における社会学=形式社会学の権利づけは、一種の残余論法であるようにみえる。すなわち「社会」を形成せしめている各々の「内容」については、もうすでに、各々を対象とする個別社会科学(ex. 経済学・法学・政治学・・・・)によってになわれている。したがって「新しい科学」としての社会学が成立しようとしたら、それらが対象としていない「独自の客体」がなければならないわけだ。そしてジンメルが見出すのが、各々の社会科学が対象とする諸々の「内容」を貫徹する「形式」となるわけである。たしかに、これはこれで他の社会諸科学が対象としていない領域に「社会学」をあてはめることによって、社会学のレーゾンデートルの権利づけにはなっている。しかしこれはあくまで消極的な権利づけでしかない。

しかしながら彼の生の哲学の側から「形式社会学」をみると、その存在意義はたんに消極的なものにとどまるものではないようにみえる。引用したように、形象・形式の問題は、「生が、たんなる動物的なものを越えた」ところで生じるものなのである。つまり「動物的な」衝動・欲求(≒「内容」?!)をこえたレベルにおいて、すぐれて「人間」=「文化」(⊃「社会」)に固有な問題として「形式」の問題が生じてくるわけだ。とすれば、「社会」(⊂人間=文化)を対象とする科学が、その固有の客体としての「形式-形象」を対象とするのは、当然と言えるだろう。

第三に、以上のような読解から、我々がはじめに設定した問題視点への解答を引き出すことができるのではないだろうか。第1節以降において我々は、ジンメル社会学の方法論における「形式」と「内容」との区分けが、一貫しておらず「形式的」という語が非对象的・非有用的欲求を形容する場合があることを指摘した。いまやこの点を新たな照明のもとで彼の思想の中に位置づけることが出来ると思う。

つまり、彼にとっての「内容」的欲求と「形式」的欲求の区分けは、彼自身の「幾何学」のたとえのように、「諸々の欲求衝動＝内容」とそれらを捨象しそれらを貫通する「形式」というよりは、むしろ、「動物的」な衝動欲求・と・自己超越的な「生」をはらんだ人間が「文化の段階」にいたるやいなやみまわれる「文化形象」＝「形式」をめぐるくだんの「二元論」的に対立する「傾向・欲求」・との区分けと言えそうなのである。「流行」論のテキストにおいて件の二つの欲求が「形式的心理的欲求」（S35、35ページ）と言いかえられているのはまさにこのような事情に依るのであろう。したがって、「秘密」「闘争」の章においては、秘密や闘争といった文化形象「そのもの」をめぐる非对象的・非有用的欲求が「形式的」といわれるのであろう。

第四に、「形式的欲求」のうちにおける我々がとくに注目している「同等性・差異性」への欲求の意義についてある含意をひきだすことができると思われる。以上のようにジンメルは、彼の議論のなかで、いくつかの「形式的欲求」をもちだして議論を進めている。我々は、そのなかで、ジンメルが「流行」論などで展開した同等性・差異性への欲求論にとくに照準したい。すでに述べてきたことからあきらかなように、ジンメルの同等性・差異性への欲求論は、たんに流行という些細な現象を説明するためにアドホックに導入されたものではない。それは、以上見てきたような、「生」をめぐる「二元論」の社会における「典型」（「流行」31ページ）として、いわばジンメルの「形式社会学」と「生の哲学」とをつなぐ要石であるともいえるだろう。その意味で、この同等性・差異性への欲求は、彼の「形式的欲求」のなかで相対的にいって優位な意義をもつものといえるだろう。

〔5〕小括

以上、我々は、ジンメルの「形式」社会学における方法論と実践の齟齬という問題を端緒として、ジンメルにおける「形式的欲求」というものをみだし、いわば形式社会学と

生の哲学を結ぶものとして、それを位置づけ、その「形式的欲求」の「典型」としての同等性と差異性への欲求の意義を探ってきた。本稿の試みは、おもに二つの方向において、次なる課題へと我々を導くことになるだろう。いうまでもなく、第一は、ここで我々が注目した「形式欲求」ならびに（その一例である）同等性と差異性への欲求がジンメルのその他の仕事のなかでどのように展開しているかを、追尾することである。そして、この第一の方向の系として、さまざまな「形式的欲求」の相互関係（したがってまた、同等性と差異性への欲求とその他の「形式的欲求」との連関）の位置づけという課題があげられるだろう。第二は、この第一の方向をふまえて、我々自身が、さまざまな社会的事象の分析に、この「形式的欲求」や同等性と差異性への欲求の視点を応用することである。（我々は、すでに端緒的ながら、（桜井1989において）この両方向の試みをいくらかしてみた）。

いうまでもないが、このような我々の姿勢は、豊穡なジンメルのテキスト群をただひとつの視点に還元することを主張するものではない。しかし、我々のようにジンメルの「形式的欲求」や同等性と差異性への欲求に注目することは、「多面的」な思想家としてのみ評価され、そしてまた「哲学者」と「社会学者」としての両面性が相互に連関されてきたとはいいがたいジンメルに対して、一つの統一的な視点からアプローチすることを可能にするのではないだろうか。そしてまた、この視点は、「哲学的」なジンメル研究と、「社会学的」なジンメル研究との架橋に役立つことにならないだろうか。

（本稿をなすにあたっての中野庸子氏の助力に感謝します）。

主要参考文献

- 阿閉吉男 『ジンメル社会学の方法』御茶の水書房、1979
- 阿閉吉男 編 『ジンメル社会学入門』有斐閣、1979
- 阿閉吉男 『ジンメルとウェーバー』御茶の水書房、1981
- 阿閉吉男 『ジンメルの視点』勁草書房、1985
- 池田光義 「ジンメル流行論への試論」『ソシオロジ』31巻3号、1987
- 石川弘義 「流行理論の系譜」『講座 現代社会とコミュニケーション 5』東京大学

出版会、1973

桜井芳生 『同一化と差異化の社会学—ジンメル「流行」論の再検討から—』（東京大学
修士論文）、1989

Simmel, G. Über sociale Differenzierung, *Sociologische und Psychologische Unter-
suchungen*, Duncker&Humblot, 1890（居安正 訳「社会分化論」『社会分化論
社会学』青木書店、1970）

——— Die Selbsterhaltung der socialen Gruppe, *Jahrbuch für Gesetzgebung,
Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich* X X II 1898（大鐘武
訳「社会集団の自己保存」『ジンメル初期社会学論集』恒星社厚生閣、1986）

——— *Philosophie des Geldes*, Duncker&Humblot, 1900（元浜清海、居安正
訳『ジンメル著作集2、3 貨幣の哲学』白水社、1980）

——— *SOZIOLOGIE Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*,
Duncker&Humblot, 1908（堀喜望 他 訳『闘争の社会学』法律文化社、19
66、居安正 他 訳「支配論」『社会分化論 社会学』青木書店、1970、居
安正 他 訳『集団の社会学』ミネルヴァ書房、1972、居安正 訳『秘密の
社会学』世界思想社、1979）

——— *Philosophische Kultur*, Gustav Kiepenheuer Verlag, 1911（円子修平 他
訳「流行」「コケットリー」『ジンメル著作集7 文化の哲学』白水社、19
76）

——— *Religion, Zweite*, 1912（居安正 訳『宗教の社会学』世界思想社、1981）

——— *Grundfragen der Soziologie*, Walter de Gruyter, 1917（清水幾太郎 訳
『社会学の根本問題』岩波書店、1979）

——— *Lebensanschauung*, Duncker&Humblot, 1918（茅野良男 訳『ジンメル著作
集9 生の哲学』白水社、1977）

——— *Der Konflikt der Modernen Kultur*, Duncker&Humblot, 1918（鈴木裕久 訳
「流行」『ジンメル著作集7 文化の哲学』白水社、1976）